

阿賀野川支流源流釣行

～古のゼンマイ小屋跡を訪ねて～



[報告者]：内野繁樹

[釣行日]：令和5年7月15日～17日

[参加者]：平江誠、矢萩武彦、大貫和之、黒須悠輔、長谷部寿一、内野繁樹

[1日目]

今回の釣行は私にとって念願の源流初釣行となった。入会直後の大蛇尾川釣行に参加させていただいた帰り際に「いや～、こんなに綺麗な源流で釣りをしたり、焚火をしながら寝泊

まりできて本当に溪遊会に入って良かったです。」と言ったところ、平江さんから「これが源流だとはくれぐれも思わないで欲しい。」との言葉があり、それ以来この言葉がずっと私の頭の片隅から離れることはなかった。今回の釣行で私はこの言葉の意味を理解することとなり、本物の源流を体感することとなった。

今回の釣行は、昨年中流部を大滝まで釣り上がった沢の大滝の上流部を釣りに行くということらしい。まずは幕営地とする大滝の上流にあると言われるかつてのゼンマイ小屋跡を目指すとのこと。前日夜から入渓地点近くの駐車場にて恒例の前夜祭が開催され、久しぶりの再会を祝してかれこれ2時くらいまで宴会が繰り広げられた。翌朝は5時に駐車場を出発し、いよいよ釣行開始となった。相変わらず不必要に釣行をハードなものとしているような気がするが、この儀式が当たり前のこととして自分の中で処理されていることに気づき、こうやってだんだん異常を正常と感ずるようになるのだなと思い、人間の学習能力及び適応能力にふと感心した。



前夜祭の風景。3人用テントの中に6人が寿司詰め。

今回の装備については、前回の大蛇尾川釣行の際に共同装備が入りきらなそうだったという反省から、ザックを65Lのものから75Lのものに新調していた。また、今回おかずは1人二品調理するというノルマがあったので、できるだけ簡単に調理できるものがあるだろうということで、一品はクラムチャウダー、もう一品はベーコンとジャガイモの炒め物とした。6人分の分量を作ることを考え、ジャガイモ大5個、ニンジン大1本、あさりの缶詰4缶、たまねぎペースト2袋、ホワイトシチューのルー1箱をザックに詰めた。酒類は350mlのビール2缶、ウォッカ700ml、ウォッカに入れるレモンスライスのためのレモン3個。この他に共同の食糧を担ぐこととなった。もちろん75Lのザックはこれらの食材やその他の装備を入れた後も十分スペースは残っていたので、もっといろいろもってくればよかったと若干後悔すらしていた。しかし、本当の源流釣行はおろか通常の登山経験すらろくにないこの時の自分は重量の恐ろしさを全く理解していなかった…。



出発直後から藪漕ぎでスタート

出だしは川を遡行するルートで足場はそれほどいいとは言えないものの、高低差もないので何の問題もなく進んでいた。ところが、しばらく進んだところで、「じゃあここから登ろう。」と言われて見上げた斜面に道らしいものはなく、非常に嫌な予感がした。予感は的中し、道のない藪にまみれた斜面を本当に登ると言っている。とにかく酷い道だった。いや、道はなかった。滑り落ちないように、漕いだ藪をつかみながら無我夢中で自分の体を引き上げ続けた。この時、ここから約 7 時間ひたすら登りが続くこととなるとは思ってもいなかった。そもそも、ルートは完全に人任せだったのでどんな行程なのかも全く把握しておらず、とにかく必死でついて行くしかなかった。釣行リーダーの黒須君から事前にメールで 1/25,000 の地図上に丁寧に赤線で今回のルートをなぞった地図が送られてきていたが、うねった等高線を見てもよく分からないのですぐにファイルを閉じてしまっていた。今回の釣行はかなり苦しい思いをしたので、苦手意識のある地図読みに真剣に取り組むきっかけになったと思う。しかし、もし事前にルートを予測できるくらいの地図読みができていたとしたら今回のハードな釣行への参加は躊躇していたことだろう…。

急登の藪漕ぎを始めて 30 分程度が経過したころから、私は重量感のある 75 L ザックの重さによる疲労と急登続きによる息切れで吐き気を覚え、ついに一步も足が前へ動かなくなってしまった。仕方なく一時休憩となったが、ペースを乱し、皆さんに迷惑をかけてしまっているという罪悪感とプレッシャーでいたたまれなくなった。正直、急登開始からの 30 分の間に退会届を提出することを何度も決意していた。そんな意気消沈している私を見かねてか、釣行リーダーの黒須君から「ザック交換しましょうか？」という申し出を受けた。その時の私に一瞬の迷いもなかった。プライドもなかった。答えはただ「Yes」のみだった。少しの休憩の後に急登を再開したが、ザックを交換してからは不思議なくらいに体調が回復し、吐き気もなくなり、急登にも体が慣れて会話を楽しみながら登る余裕が出てきた。黒須君のザックは重量もさることながらパッキングがしっかりされていて、背負ってみると左右に振られることもなく、実に背負いやすく無駄に体力が奪われるようなことはなかった。今回身をもって軽量化とパッキングの重要性を思い知ることとなった。黒須君はというと、私の重量感のあるザックを背負っても体力的には全く問題はなかったのだが、私のパッキングのバランスが悪かったせいか時折ふらつき転倒していた…。黒須君、本当にありがとうございました！

まだまだ道中長いのでそれなりのペースを保つ必要があったのだが、私が回復したのと入れ替わるように今度は長谷部さんがバテ始めた。あとでザックの中を見てみたところ、どうやら 500ml のビール 2 缶、瓶のままのウィスキー、その他重量感のある装備が私に劣らず満載だったようである。私と長谷部さんは完全に今回の釣行の足かせとなってしまっていた…。



登りが終了したあたりでの一枚。一人顔色が悪い私。



象の鼻だ！と言ってはしゃぐ人達。コメントは控えたい。



1.5 m 滝を懸垂下降。これぞ源流釣行という感じですね！

結局、目標としていたゼンマイ小屋跡まで到達することはできず、途中で見つけた手頃な高台をテンバとすることとなった。この時既に時刻は16時を回っていた。5時に出発したので、実にテンバ到着まで11時間歩き通しだったことになる。私も長谷部さんも足が尋常ではないほどの筋肉痛で、テンバについた瞬間に帰りのことを思って気が重くなっていた。するとにわかにな長谷部さんがもぞもぞしだし、「ロッドを途中で落として来てしまったみたいなんですけど…」と言い出した。わざわざ11時間もかけて険しい道のを乗り越えて釣りに来たのに釣り竿がないなんて話はとても笑えないが、一同大爆笑だった。今から来た道に戻って探しに行く程の体力は残ってないし、暗くて危険なので明日の朝一で探しに行こうということとなったが、楽しい宴会が始まるとそんなこともすぐ忘れてしまった。毎回思うことだが、溪遊会の皆さんは料理が大変上手で、源流とは思えない一品を作るので私にとって料理の時間はかなりのプレッシャーだ。私も下手なものは出せないと思い気合を入れてきたのだが、私のザックから大量のジャガイモ、ニンジン、缶詰めが出てきたのを見て、

そのザックを背負って来た黒須君は何か言いたそうであった。私は彼と視線を合わせることを避けた。



テンバでの寛ぎの風景。

宴会が開始された直後に重大な問題が発覚した。共同装備のバーナーは私と長谷部さんに割り振られており、2台のバーナーで6人分の調理こなす予定だったが、長谷部さんが持参したバーナーが火力の調節ができないというレベルではなく全く使いものにならないものだったのである。アマゾンで購入した中華製のもので、家で試運転等のチェックはしてこなかったらしい。ここで大貫さんから長谷部さんへ愛情あふれる指導が入ったのは言うまでもない（具体的な指導内容への言及は控えたい。）。結局、煮ても焼いても食えないバーナーは蚊取り線香の台として使用してすることとなった。このような事情で6人分の料理を一台のバーナーで調理することとなり、それぞれの調理にかなりの時間を要することとなったのだが、何とか無事に全員分の調理をこなすことはできた。しかし、最後の料理が出される頃には私の疲労は限界に達しており、最後の料理を食べるや否や泥のように眠ってしまった。



どちらが問題のバーナーかは一目瞭然。



大量のじゃがいもと人参を使用した源流クラムチャウダー。



調理風景。大型カディスの急襲に遭いつつ一台のバーナーで何とか乗り切った。

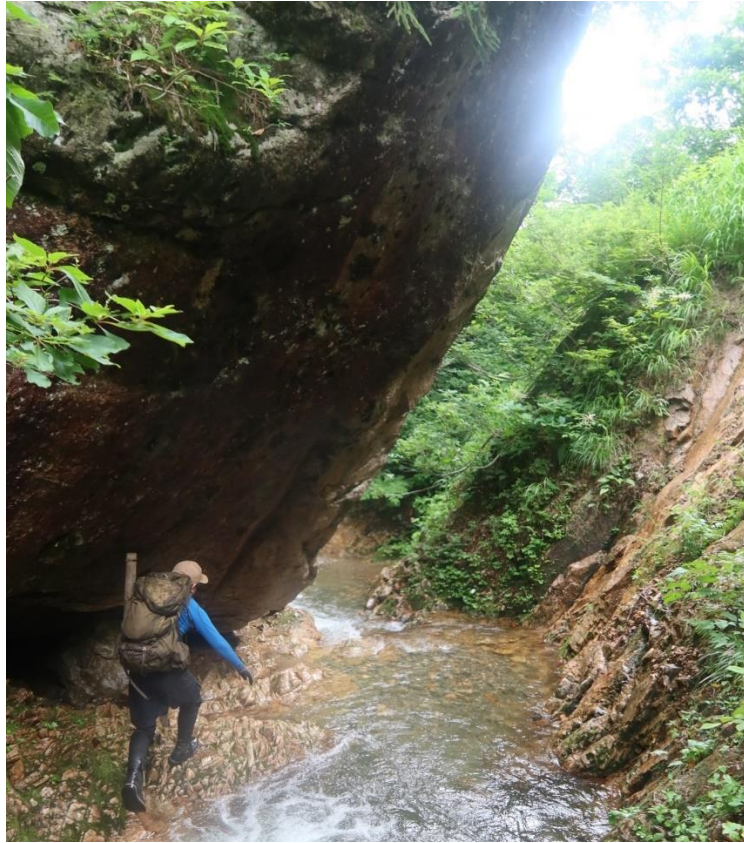
[2日目]

2日目は待ちに待った源流での初釣行だ。長谷部さんのロッドはというと、朝一で探しに行ったところ奇跡的にテンバから少し戻ったところのたるみで発見できたようだ。さすがにこの源流を目の前にして自分の竿で釣りができないというのはかなり気の毒なので見つかって本当に良かった。



美しい源流で朝からきちんと炊きあげたご飯が食べられるなんて幸せだ。

朝食を済ませて出発となったが、やはり筋肉痛がかなりひどい。テンバから釣り場までは大体一時間ちょっとかかるということなので、この脚で大丈夫なのかと思いつつ、少し歩いているうちに筋肉痛のことは気にならなくなった。ところどころ岩をよじ登ったり、足場が見えない流れ込みに飛び込んだりと筋肉痛を気にするような余裕がなかったというのが正直なところだ。予定通り当初テンバとする予定であったゼンマイ小屋跡へは小一時間で到着し、遡行してきた本流は少し休ませるためにまずは支流を釣りあがることとなった。

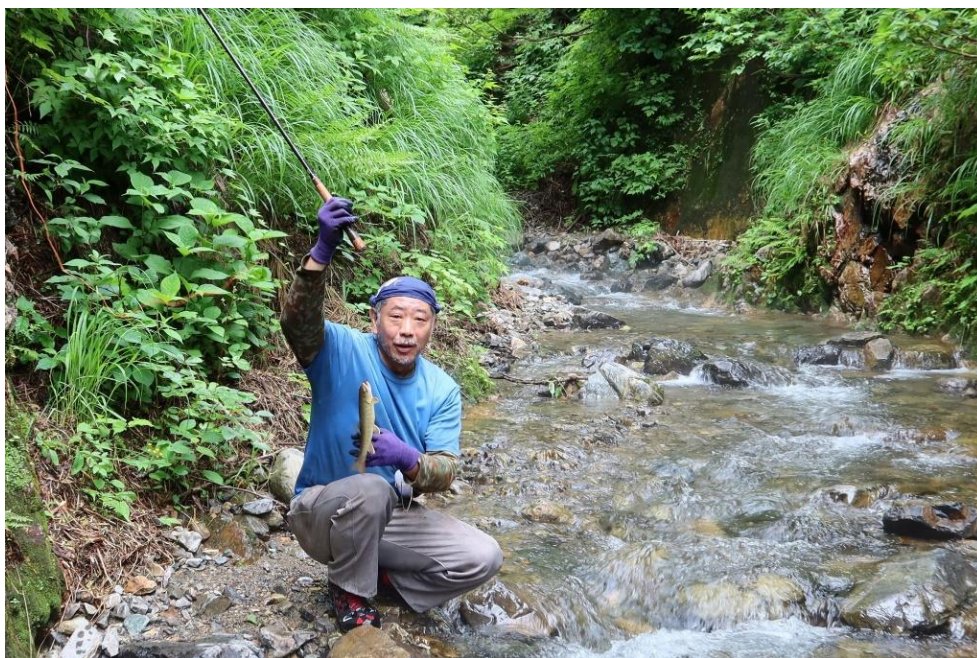


ところどころにダイナミックな溪相。



ゼンマイ小屋跡に到着。水場が近く真っ平な極上テンバだがとにかく遠すぎる…。

平江さんはテンカラ、矢萩さん、長谷部さんはルアー、黒須君は餌釣り、私はフライという釣法で、それぞれの釣法に適した流れを譲り合いながら各人が竿を出した。残念ながら、大貫さんは初日に少し足を痛めてしまったため大事をとって釣りはお休みだ。釣果はというと、やはり人が足を踏み入れない源流ということもあって、ここぞという流れには必ずイワナが入っていて面白いように釣れた。しかも当然すべて天然魚なので魚体はかなり美しい。



まずまずの型を釣り上げる平江さん。



こちらもいい型ですね！かなり嬉しそうな矢萩さん。

支流を釣り歩いている時に平江さんがウルイを発見し、昼食のラーメンに入れようということとなった。私はウルイを食べたことがなかったのだが、独特のぬめりがあって非常に美味しかった。やはり渓遊会に入って良かったと思う瞬間だった。



黙々とウルイの筋を取る矢萩さんとラーメンを作る長谷部さん。

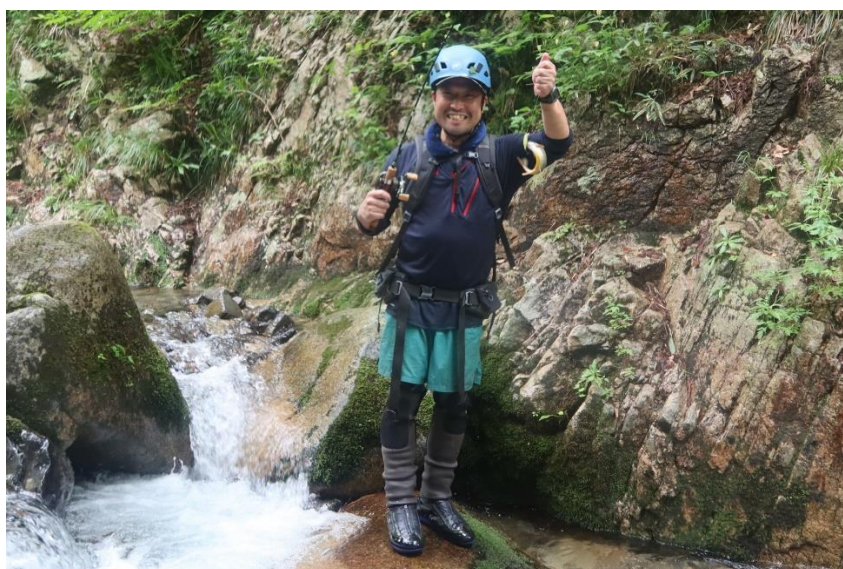


必死にイワナを捌く黒須君。



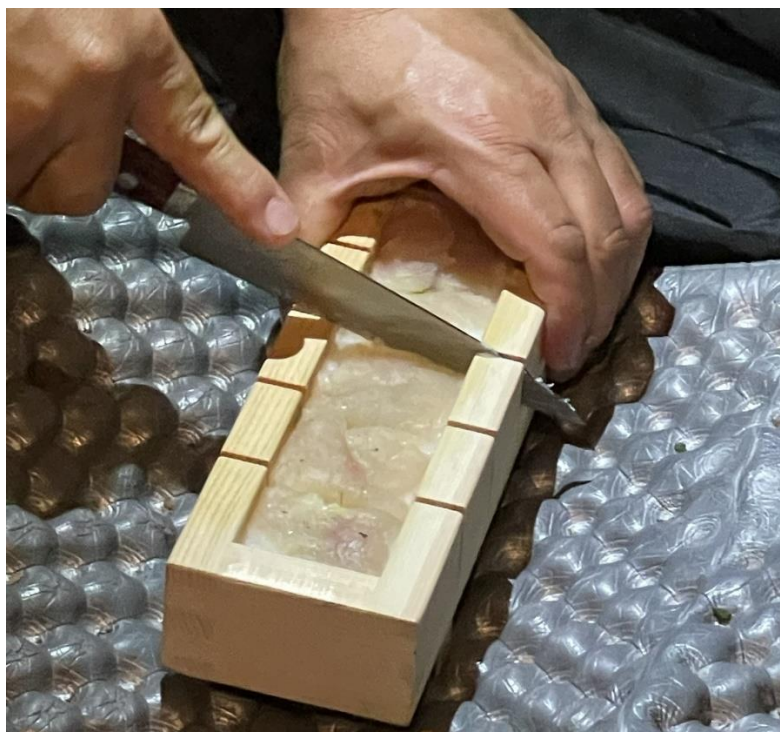
源流で冷えた体にラーメンは最高ですね。

昼食後はテンバに戻るため本流を釣りあがりながら来た道に戻ったが、本流のイワナは支流よりサイズアップしているようだった。釣果としては全員で40匹は優に超えていたと思う。そんな中で、使い物にならないバーナーを持ってきた長谷部さんがなんと尺上を2本釣り上げた。



使いものにならないバーナーを持ち込んだ長谷部さん。

テンバに到着すると早速2日目の宴会が始まった。2日目は長谷部さんの尺上イワナの釣果もあって押し寿司が振舞われることとなった。押し寿司を作るための型は大貫さんが持ってきたのだが、この型で作られた押し寿司の美しさと美味しさに感動して、下山後即座にアマゾンで同じ型を注文した。大貫さんは料理が上手な上に沢登りの知識も豊富で、一緒に釣行すると本当に学ぶべきことが多い。



初めて見る押し寿司の型。これは…素晴らしい発明品だ！



型から外されたイワナの押し寿司。これが食べられるのは源流釣り師の特権ですね。

なお、2日目も長谷部さんのバーナーが全く役に立たないため各自の調理にかなりの時間を要することとなったが、その間もいろいろな話に花が咲き全く退屈することはなかった。そんな中で、大貫さんの長谷部さんへの愛情あふれる指導が話題となった。ハードな釣行の疲れを和らげてくれる毎回恒例の非常に面白いやり取りなのだが、あのやり取りを録画したらいい感じのハラスメント講習の教材になるんじゃないか、来年の総会でハラスメント講習として上映しようか？という話になったが、平江さんの、「別に普通じゃないか！という怒号が浴びせられるだけなので意味ないよ。」という発言に、一同爆笑し、結局愛情あふれる指導が録画されることはなかった。誤解がないよう記しておくが、大貫さんは毎回の釣行で長谷部さんのことを本当に良くサポートしている。今回の釣行でも長谷部さんの中華製の軽アイゼンが壊れたら知恵を絞って直してあげたり、長谷部さんがペースを考えず自分の水を飲み切ってしまったら自分の水を分け与えてあげたりと、まるでその姿は長谷部さんの母親のようだった。そんな話をしながら次第に夜も更け、2日分のハードな釣行の疲れもあり、1日目に引き続き2日目も気を失うように眠りに落ちていた。



ジャガイモとベーコンの炒め物。黒須君の口に合った用で良かった。



長谷部さんが作った酢豚。バーナーは私が持参したもの。

[3日目]

天気予報では雨か良くて曇りという予報であったが、目を覚ますと気持ちのいい晴天だった。やはり夏の溪流には晴れが一番似合う。朝食を済まし、片付けをしてテンバを出発したのは8時頃だった。行きは11時間かかった訳だが、帰りはどれくらいかかるのか…。長谷部さんの顔を見ると案の定不安そうだったが、私もかなり不安だった。



お粥を作る予定だったかは不明だが、結果的に美味しいお粥を作った黒須君。



最終日の朝ご飯。お粥の上にキクラゲと卵の炒め物が乗っかかりかなりの満足感。

結果的に、帰りは行きとは異なる沢を詰め上がるルート選択が功を奏し、長時間きつい傾斜を登り返す必要がなくなったのは本当に助かった。後は 5 時間程度の下りを残すのみとなったが、下りといえども登山道ではない道を下るのは非常に神経を使うとともに、天気が良かったこともあってかなりの体力を消耗した。



源頭部付近での一枚。



水を飲み切ってしまった長谷部さんに自分の水を分け与える大貫さん。



随分前に限界の向こう側に行ってしまったと思われる長谷部さん。



無事川に降り立ち限界の向こう側から戻ってきた長谷部さん。



川に降り立ち皆が休憩する中ロープを片付ける黒須君。本当に働き者だ。

尾根道から川に降りる最終地点でロープを使用しないと川に降りられない崖が出てきたときには、もう足が限界に達していてさすがに心が折れそうになった。何とか川に降り立つことができた時には、もう藪を漕がなくていいということに例えようのない安堵感を覚えた。そして、その後しばらく川を下りようやく駐車場にたどりついた時には、ここ数年で感じる事のなかった達成感を感じた。自分と同等以上の熱量をもって溪流魚と川と山を愛する仲間に出会えて本当に良かったと思った。最後に平江さんに「これで自分も源流に行っただけでいいですか?」と聞くと、「もちろん、今回の沢だったら胸を張って源流に行っただけでいいよ!」とお墨付きをいただくことができたのは本当に嬉しかった。

今回のメンバーの中では長谷部さんと私の経験が浅くペースを乱しがちだった中、平江さん、矢萩さん、大貫さん、黒須君から手厚いサポートをいただいたおかげで無事に楽しく釣行を終えることができました。本当に感謝しています。黒須君はリーダーとして様々なものに気を配りながら、体力を消耗してしまう道の偵察から全員分の水汲みまで骨の折れる仕事を黙々とこなしていて本当に立派だったと思います。平江さんの長年の経験に基づくアドバイスには重みと説得力があり、アスリートのような身体能力と無尽蔵のスタミナには毎回驚かされます。平江さんのような源流マンになれるようにこれから自分も精進してい

きたいと思います。矢萩さんはテンバにつくや否や手際よくタープを設営し、設営が終わると薪集めに奔走し、薪集めが終わったら焚火の世話をしたりと、疲れている中でもとにかく他のメンバーのために休むことなく働く姿勢には頭が下がりました。自分ももっと働かなければいけなかったと反省しています。大貫さんは技術的なサポート、アドバイスもさることながら、疲れて言葉も出なくなる山行中も楽しい雰囲気を作ろうと盛り上げてくれました。年齢は同じですが、本当にいい兄貴だと思います。長谷部さんは、いてくれて良かったです。

今回は本当に楽しい源流初釣行となりました。ご一緒させていただいた皆さんのおかげで私だけでは絶対に見ることができない景色を見ることができたと思っています。どうもありがとうございました！是非またご一緒させて下さい！

